

このコーナーでは本学の関係者が書いた話題の本を紹介していきます。本学出身の作家としては、古くは坂口安吾(昭和5年印哲卒)が、現代では「浅見光彦シリーズ」が人気の内田康夫さん(同30年国文入学)、漫画「人間交差点」の原作やドラマの脚本等で知られる矢島正雄さん(同47年英米文卒)、最近では「猛スピードで母は」で第126回芥川賞を受賞した長嶋有さん(平成8年国文卒)など多くの方が活躍しています。

金融も本音の時代に

経営学部教授
宮村健一郎氏



4月上旬の発売翌週にはインターネット上のビジネス書籍売上ランキングで10位に登場、現在も好調な売れ行きが続いている。決して万人向けに分かりやすく解説された本ではなく、こういつた至極まじめな金融本がベストセラーのランク入りをするのは珍しいことだという。その売れ行きの秘密と書かれた背景について、著者である宮村教授ご本人に迫った。

「現在日本の金融関係者は口をそろえて、『不良債券処理を』『抜本的な金融政策を』だの、後ろ向きなことばかり。もっと攻めの姿勢で前向きに金融政策の在り方について考えていけないか、と提案したのがこの本です」と宮村教授は語る。

これまで金融政策について語る人はいたが、日本では国の規制産業だったこともあって、実は金融のサービス内容について語った人はほとんどいなかった。「政策を考える側の人間には経済畑の人が多く、ビジネス面で金融を語る人がいなかったんです」。

日本の3年先に行く、というアメリカでのインターネットを活用したeバンキングを題材に、その現状と問題点を分析した。

読者として想定しているのは金融業界で実務に携わる銀行員や金融行政担当者だ。「この国の金融政

策について『このままじゃいかん』と真面目に考え、危機感を持ったエリート銀行員が読んでいる」と分析。「この本が売れているというのは、ちょうど時代のニーズにあっただけでしょう」。

バブル期は個別の営業はばかばかしい、省庁のご機嫌伺いでよし、とする金融営業マンの風潮が蔓延していた。また「業界でも新しい金融サービスを何も考えてこなかったのは問題」と指摘する。

「これからの金融商品には安価なアドバンスサービスが必要で、eバンキングにはその可能性があります。本書を通して宮村教授は日本の金融機関に対し、「高い競争力、高い収益性に加え、国民に対して世界レベルのサービスを提供すること、もう一度世界を舞台に復活してほしい」と叱咤激励する。



「アメリカのeバンキング」
宮村健一郎 著 有斐閣 2,300円

アメリカ人の危うさを活写する

ジャーナリスト
矢部 武氏 (昭和53年商学科卒)



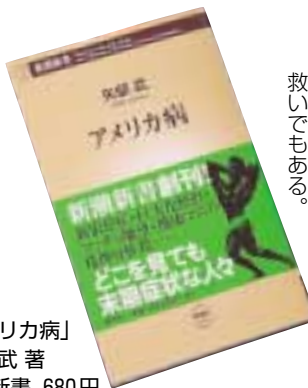
このところ、アメリカの様子がちょっとおかしい。70年代からアメリカ社会を見続けた「セカンドチャンス」を与える国アメリカ(共同通信社)などの著書を持つジャーナリストの矢部武さんが「あえてアメリカの嫌なところばかりを取りあげた問題作が本著だ」。

見せかけだけの「幸せな家庭」、過剰までのマツチョ・健康信仰、整形礼讃等々「常にタフで強くて正しくなければ」という強迫観念にとり憑かれたアメリカ人の危うさを活写する。「本著が悪いアメリカの象徴なら、大らかで、常識と知性を持った素晴らしい人たちが沢山いるのも事実。その両者が切磋琢磨して多様性やエネルギーを生み出していくのが本来のアメリカなのですが、『9・11』のテロ以後、そのバランスが悪くなっているようです」。著書の矢部さんはイラク攻撃など他国への強硬姿勢を強め、国際社会で迷走する最近の同国を危惧する。

映画・音楽に始まり、生活のあらゆる場面に米国文化は溶け込み、日本に生活していても影響を受けないでいる人はいないだろう。しかし、本著は多くの日本人がアメリカに対して抱いている甘い幻想をことごとく打ち砕く。「多様性の中から批判精神を養ってほしい」

「アメリカの良さも悪さもよく知った上で、日本より50倍恐ろしい、でも100倍面白い、国と付き合っていたきたい」というのが本作を通じた著者のメッセージだが、内容はどこまでも救いがなく、そして重い。

本著への理解を深めるために「アメリカってどんな国?」(円道まさみ著、新日本出版社)も併せてお勧めしたい。在米20年に及ぶ著者がこの国が抱える問題を温かく、客観的な視線で描写している。また、当のアメリカ人はこうした問題をどう捉えているかは「アホでマヌケなアメリカ白人」(柏書房)に詳しい。著者のマイケル・ムーア氏は数々の政治的圧力に屈せずユーモアを交えてアメリカ社会の闇を告発し続ける反骨のジャーナリスト。アメリカの良心である。こういう人が出てくること自体がこの国の救いでもある。



「アメリカ病」
矢部 武 著
新潮新書 680円